

『ユーモア』は、生きる力

私が昨年終末期ケア専門士の資格を取るための勉強をしていた時、アルフォンス・デーケン先生の存在を知りました。今回は、デーケン先生から学んだことなどご紹介させていただきます。

ドイツ人のアルフォンス・デーケン先生は、1959年に来日し、上智大学で教鞭を執り、「死の哲学」「人間学」「生と死の教育」などの講座を持ち精力的に活動されていました。

来日当初は日本ではまだ死を忌み嫌う感覚があったようです。

1982年には「生と死を考える会」を発足し、「死の準備教育」を始めました。



デーケンさんは世界中の200あまりのホスピスを訪問し、生と死について研究してきましたが、人間が最期を迎えるときに「ユーモア」の大切さを強調しています。「ユーモアには死への過剰な恐怖や不安を和らげたり、緊張をほぐして怒りの感情を鎮め、人生の苦悩のさなかにあっても自分を客観視して笑い飛ばせる効用があります。

テキサスにあるカトリック系の病院では「毎日1回は患者を笑わせましょう」という運動を奨励していました。するとその病院の入院患者は他の病院より早く退院できるようになったというお話があります。ドイツで一番有名なユーモアの定義は、ユーモアとは“にもかかわらず”笑うことである、といます。「自分は今苦しんでいます。しかし、それ“にもかかわらず”相手に対する思いやりとして笑顔を示します。」と言う意味で、これが真に深みのあるユーモアだと思います」と語っています。

病院や、ホスピス、死にゆく人たちの看護の中にユーモアや笑いを取り入れるのは難しいかも知れませんが、にもかかわらず、だからこそ、より必要なのでは、と語られています。

ある患者さんの川柳に「看護師さん 下から見れば みな美人」というのがありました。

クスッと笑えて、和やかな雰囲気が拡がりそうですね。

■私もその影響を受けて、「出会ってくれた人たちに、一日一回笑ってもらう」を意識しています。私は子どもの頃、よく泣いている事が多かったのですが、「人間笑ってなんぼやからね」とよく聞かされていました。

・デーケン先生の「よく生きて、よく笑って、よき死に出会う」を私も目指して、毎日ユーモアのセンス磨いて、私もそのうち…関西人の血が騒ぎ、お笑い芸人になるかもしれません。

てのひらユーモア委員会の会長立候補される方のお声を、お待ちしております☆

今月もまだまだ暑さ続く中、よく頑張ってくれました皆さんに感謝致します。

2004.9.10

呉 静恵

